

ユング心理学から見た フレーベル教育学の研究について

豊 泉 清 浩

群馬大学教育学部学校教育講座教育学教室
(2013年9月18日受理)

Über die Forschung der Pädagogik Fröbels aus dem Gesichtspunkt von der Psychologie Jungs

Seiko TOYOIZUMI

Department of Education, Faculty of Education, Gunma University

(Accepted on September 18th, 2013)

はじめに

フレーベル (F.W.A. Fröbel, 1782-1852) の教育学の先行研究において、彼の世界観・基本思想である「球体法則 (das sphärische Gesetz)」の意味の解釈には、どうしても判然としない部分がある。その判然としない部分を、ユング (C.G. Jung, 1875-1961) の「分析心理学 (Analytische Psychologie)」を方法として解釈すると、球体法則が錬金術の思考法に近いことが見えてくる。

それゆえ本稿の目的は、フレーベルの教育学および球体法則を、ユングの分析心理学を方法とし、父性と母性の観点から考察する際、どのような目的が見出せ、どのような知見が得られるかを探ることにある。本稿では、まずフレーベルに関する先行研究について見て、ユング心理学から見たフレーベル教育学の研究の目的を述べる。また、この研究方法の観点から、幼稚園禁止令の理由、フレーベル教育学批判の意味について考察し、その背景としてフレーベルの球体法則が錬金術に近い思考法であることが関連していることを明らかにする。

1. フレーベルに関する先行研究

わが国では、明治期にフレーベル主義の幼稚園が導入されている。酒井玲子の著書『わが国にみるフレーベル教育の探求』(2011年)は、明治初期の幼稚園の開設から、婦人宣教師によるフレーベル教育の展開、フレーベル研究の進展など、第二次世界大戦後の長田新のフレーベル研究まで論究し、わが国におけるフレーベル教育の動向を歴史的に検証している⁽¹⁾。その歴史的な流れを、フレーベル研究の観点から概観しておく。

わが国におけるフレーベルの幼稚園の紹介に関しては、明治初期に、中村正直や関信三が翻訳を發表している。その後も、小西信八のフレーベル伝の研究や、また『人間の教育』や『母の歌と愛撫の歌』の翻訳本などが發表されている。

大正自由教育の時代を迎えると、アメリカの進歩主義教育の影響が見られ、デューイ (John Dewey, 1859-1952)、キルパトリック (William Heard Kilpatrick, 1871-1965)、スタンレー・ホール (Granville Stanley Hall, 1844-1924) のフレーベル観が紹介されている。倉橋惣三は、多角的なフレーベル研究を行ない、「フレーベル主義新釈」や著書『フ

レーベル』を発表し、独自のフレーベル理解を展開した。

昭和前期には、後藤真造の著書『教育者としてのフレーベル研究』（1930（昭和5）年）、小川正行の著書『フレーベルの生涯及思想』（1932（昭和7）年）などが刊行されている。

ペスタロッチー研究者として知られる長田新は、フレーベル研究者でもあった。『児童神性論』（1924（大正13）年）、『フレーベル自伝』（1937（昭和12）年）、『フレーベルに還れ』（1955（昭和30）年）などの著書を刊行した。長田のフレーベル研究は、「フレーベルの『真精神』の理解への接近であり、英米文献のフィルターを通した研究ではなく、ドイツ直輸入の原典に依拠した研究である。この研究方法こそが長田の教育史学の全体を貫いていたものである。」⁽²⁾ この研究方法が、荘司雅子に継承されることになる。

さて、戦後のわが国の本格的なフレーベル研究として、荘司雅子、岩崎次男、倉岡正雄の研究を取り上げる⁽³⁾。

荘司雅子は、日本におけるフレーベル研究に先鞭をつけ、この分野を開拓した、まさに日本を代表するフレーベルの研究者である。処女作である『フレーベルの教育学』（初版：大八洲出版、1944年／復刻：玉川大学出版部、1984年）は、それ以前は断片的かつ重沓的でもあったフレーベルの思想と理論の研究を、ドイツ語原典から訳出することにより、初めて全体的かつ総合的に考察したものである⁽⁴⁾。この書は、その後の本格的なフレーベル研究における先駆的な位置を占めている。学位論文となった『フレーベル研究』（初版：講談社、1953年／復刻：玉川大学出版部、1984年）は、フレーベル教育学の諸原理を一層深く根本的に探求し、それらを総合的、体系的に把握したものである⁽⁵⁾。

荘司は、濃厚な宗教的色彩を帯びているロマン主義の思想として、フレーベルの教育学、幼稚園、恩物を捉えている。荘司の研究に触発されて、わが国のフレーベル研究は発展してきた。

岩崎次男は、博士論文に基づく多年に亘る研究の成果をまとめたものとして、『フレーベル教育学の研

究』（1999年）を公刊した⁽⁶⁾。岩崎は、球体法則の探究は避けてしまったが、当時のドイツの幼児教育の状況から、フレーベルの幼稚園の意義を捉えた点、国民教育の観点からフレーベルの思想形成と教育実践の結びつきを克明に描き出した点、また「自由教団」と幼稚園のつながりが幼稚園禁令の最大の理由の一つであると指摘している点などが、重厚な研究における独自性を示している。

倉岡正雄は、長年のフレーベル研究の集大成である博士論文に基づく『フレーベル教育思想の研究』（1999年）を出版した⁽⁷⁾。倉岡は、従来のフレーベル研究が、フレーベルをロマン主義の思想家として捉え、感情を主体として「無限」を憧れる思想家であることを前提にしている研究が多いと指摘する。倉岡は、フレーベルが、感情を育むものや、「無限」という概念をどのように位置づけていたかを、合理的に思想内容を理解していく過程の中で明らかにしなければならないと考える。倉岡は、フレーベルの思想を、合理的に探究し、法則観の解明に主眼を置いている。

また、小笠原道雄は、『フレーベルとその時代』（1994年）において、ハイラント等の文献に依拠しながら、解釈学的方法によって、フレーベルの生涯の歩みと思想の展開を関連づけて考察している⁽⁸⁾。とりわけ、球体法則についての解釈、学校教育構想、キンダーガルテン、幼稚園禁止令の真の理由などに、独自の解釈と新たな知見が見られる。

さらに、わが国には、ドイツにおける精神科学的教育学派のフレーベル研究の翻訳も紹介され、フレーベル研究に厚みを持たせている⁽⁹⁾。

2. ユング心理学から見た研究の目的

本研究は、フレーベル教育学研究の本道は、彼の世界観・基本思想である球体法則の意味を解明することにあるという立場にある。この点から見れば、フレーベル教育学をロマン主義の観点から論究した荘司雅子の研究や、フレーベルの法則観を明らかにしようとした倉岡正雄の研究、そして精神科学的教育学派のフレーベル研究の立場に近いといえるかも

しれない。したがって本研究は、球体法則についての論究を避けてしまった岩崎次男の研究とはかなり異なる方向性を持っている。球体法則の意味を解明しようとする点において、本研究は、法則観の解明に力点を置いた倉岡の研究に近いが、倉岡が、フレーベルが影響を受けた思想に留まることなく、フレーベルには独自の思考形式があり、それを完全に把握し切れないと指摘している点をさらに深めようとする。その点を深める際に、どうしても心理分析の方法を用いなければ、球体法則のより深い意味を解明できないというのが、本研究独自の観点である。すでに小笠原道雄は、フレーベル研究における「心理分析」の手法による解読の必要性について指摘している⁽¹⁰⁾。

フレーベル教育学の思想史的解明については、従来、ロマン主義の潮流の中に捉え、フィヒテ、シェリング、ゲーテ、クラウゼ、ノヴァーリスなどの影響を受けていることが指摘されてきた。もちろんこの指摘は妥当であり、その影響が確かに認められる。しかし、どうしてもフレーベルの神秘主義思想の部分は、従来の研究ではその意味が十分捉え切れていない。

こうして本研究は、フレーベル教育学およびその世界観・基本思想である球体法則を、ユングの分析心理学を方法として、父性と母性の観点から考察することを目的としている。その際、何を明らかにしようとするのかについて、主に次の三つの目的があることを述べておきたい。

本研究の第一の目的は、フレーベル教育学における学校教育から幼稚園教育学への展開を、父性に基づく教育から母性に基づく教育への展開として捉えて考究することにある。フレーベルの教育活動と著作との関連に注目すると、当初、学校構想に比重が置かれていたが、スイスでの活動を経て、その後幼児の保育と家庭の改革、すなわち幼稚園教育に重点を移していく。この展開を、父性から母性への方向性において捉える。

この事情は、フレーベルの次の三つの論文を比較してみると明瞭に読み取ることができる⁽¹¹⁾。三つの論文とは、「カイルハウ小論文集」の一つである「わ

がドイツ民族に寄せる」(1820年)⁽¹²⁾、『人間の教育の概要』(1833年)⁽¹³⁾、そして「フレーベル自身の叙述による、時代の努力と要求とに関するフリードリヒ・フレーベルの教育の根本原理、教育の手段と方法ならびに教育の目的と目標」(1850年)⁽¹⁴⁾(以下「教育の根本原理」と略記する)である。

「わがドイツ民族に寄せる」では、神は人間の父であり、人間は神の子であるという思想に貫かれ、神の強い父性が示されている。神とイエスの関係を、父と息子の関係と同一のものと見なし、父親の本性は息子に継承されると考え、家父長制を前提としている。教育の主体は神であり、したがって教育の究極の目的は、宗教教育にあり、神との合一を実現することであると認識している。そしてこの教育は、家族内や民族内の相互信頼を基礎とする。また、幼児期の独自性と重要性が認識されている。ドイツ民族の歴史的使命を認識した上で、ドイツ民族に対する一般教育を目指している。家庭と学園の連携が不可欠であると認識し、家庭生活と学校生活の連続性を尊重している。

『人間の教育の概要』では、万物に神的なものが宿っているという球体法則に基づいて、人間の使命は人間に宿っている神的なものを表現することであり、神的なものを表現することへの助成が人間の教育であるということが明確に示されている。人間の発達段階は、それぞれが重要であり、各々の発達段階は有機的に結合している。自然は、万物に内在している内的法則を表わし、自然は、神聖な啓示の言葉ともなる。この教育法は、自然や自己の生の中において、神の啓示を読み取るべきことを、あらゆる階層、あらゆる職業の人々に訴えかける。神は人間の父であり、人間は神の子であるという観点が強調され、この教育法は、神の賜物であり、神の父性愛の印であると考えられている。この教育法は、キリスト教に基づくものであり、宗教に属するものである。この教育法は、あらゆる時代、あらゆる場所に有効であるが、とりわけ時代のドイツ民族の根本要求としてさし迫った要求である。

「教育の根本原理」において、フレーベルは、時代の教育的努力の要求として、自己創造と自己活動

の尊重、真の母性を育成すること、女性の使命と品位を認識すること、子どもを独自の存在として認めること、共同体の一部としての家庭生活の自覚、家庭と学校との関係を確立する努力、生の合一という教育の目標の確認などを挙げ、さらに部分的全体の自覚、活動衝動や作業衝動の尊重、対立の法則ないし媒介の法則の確認などについて論究している。また、女性が人間の最初の教育者であること、幼児期の教育における男性の役割の重要性も強調している。この論文は、幼稚園の普及という目標と呼応し、女性に備わっている自然で本能的な母性を自覚された真の母性に高め、人間の最初の教育における母親の役割の重要性を女性の使命として自覚させることを力説する点、幼児期の教育における父親の役割にも言及している点、また恩物の体系との関連においてこの教育的努力を媒介の法則で説明している点に特徴を有する。

フレーベルは、ドイツ民族の国民的再興を、教育を通して実現しようとしていた。当初、学校構想によって教育改革を行なおうと考えていたが、のちに幼児の保育と家庭の改革という構想へと重点を移す。このような学校から幼稚園への重点の転換は、父性に基づく教育から母性に基づく教育への転換を意味しているように見える。しかし、このような変化は、教育改革による国民的再興という目的や人間形成の原則である球体法則が変化したと見るべきではなく、それらを背景とした教育の基本構想が発展したものとするべきであろう。というのは、フレーベル教育学の全体像を見渡してみると、家庭と学校の結合という観点から展開されている学校教育の構想が、幼稚園以後の教育を示唆しているものであることが理解できるからである。

本研究の第二の目的は、球体法則を対立物の結合の思想と捉え、球体法則が父性と母性の調和を目指す思想であることを明らかにすることである。このことは、球体を物理的な意味だけではなく、心の問題として捉え、個性化過程において実現を目指す「自己」のシンボルと捉えることを意味する。またこのように捉える思想的背景として、球体法則をグノーシス主義および錬金術の系譜に連なるものとする。

したがって、球体法則を対立物の結合の思想と捉えることは、同時にフレーベルの錬金術師としての側面を探ることを意味する。

球体法則は、対立の法則であり、男性と女性の法則であるが、同時に対立物を包含し、結合する思想である。フレーベルは明らかに、球体を、対立を統合するシンボルと見ていた。この球体を物理的な球と捉えるだけではなく、心の問題の投影として捉えることによって新たな知見が得られる。この捉え方は、錬金術に由来する。

ユングは、錬金術の作業が重要な心理学的意味を持つことに注目している⁽¹⁵⁾。それは第一に、錬金術の作業過程と、人間の心理的過程が一致することであり、第二に、対立する二つのものとは違う第三のもの、対立するものの統一である最終物質を目指していたことである。この最終物質は、「ラピス」と呼ばれ、石を意味する。ユングは、人生後半に心の中の諸対立を統合する自己形成の働きを「個性化 (Individuation)」と名づけ、この「個性化過程」の到達点を「自己 (Selbst)」という言葉で表わす。錬金術で目指す最終物質、あるいは錬金術書に出てくる、蛇が自らの口で自らの尾をかんでいる円環、すなわちウロボロス、そして、球体や円のシンボルは、心の諸対立を統合した「自己」を表わしている。したがってユングは、錬金術の作業過程は、個性化過程と同様の意味を持っていると考えた。つまり錬金術師が作り出そうとしていた最終物質は、「自己」のシンボルであったと考えられる。

錬金術の作業における対立の結合は、男性的なものとの女性的なものとの対立を前提としていた。球体法則における対立と結合は、これと同じ方向性を持ち、男性的なものとの女性的なもの、父性的なものとの母性的なものを統合し、結合することを意味していたと考えられる。ユングは、対立物の結合を目指した錬金術の源流は、キリスト教の教義が成立する時代に、キリスト教と激しく対立したグノーシス主義に求められると考える⁽¹⁶⁾。

本研究の第三の目的は、球体法則における父と母と子の三位一体を宗教的關係と捉える点は、フレーベルにおけるマリア崇拜を根拠とするものであり、

球体法則は、マリア被昇天の教義を先取りするものであることを探ることにある。また、このことに関連して、球体法則を思想的背景とする幼稚園は、女性の地位向上、婦人解放を目指す側面を持っていたことも明らかにする。

フレーベルは、論文「新しい年 1836 年は生命の革新を要求する」において、「生命の革新」と「生命の若返り」のためには、純粋な家庭生活の実現が急務であることを力説している。そこでは、三位一体としての父と母と子を神的なものを実現する宗教的關係と捉えている⁽¹⁷⁾。この三者の相互信頼によって純粋な家庭生活を実現しなければならないと説く。

球体法則は、キリスト教を根底に置くが、キリスト教の正統な教義である神、聖霊、イエスという男性性・父性に偏った三位一体ではなく、父と母と子の三位一体を宗教的關係と捉え、そこに女性性・母性をも包含している。この場合、母は明らかにマリアを暗示している。

キリスト教の内部において、女性性や母性を象徴するものは、聖母マリアである。長らく人々の間にマリア崇拝が生き続けていた。1950 年、カトリックでは、「マリア被昇天」を正式な教義として認めると宣言するに至った。マリア被昇天とは、マリアが死後肉体のまま天に昇って、天の女王である花嫁として迎えられ、神と結婚すること、つまり神性を与えられたということの意味する。ユングは、マリアをキリスト教における母元型と捉え、マリア被昇天を、キリスト教の教義において女性性・母性を公認したものとして高く評価している。

フレーベルの球体法則は、父と母と子の三位一体を宗教的關係と捉えることにおいて、マリアの神性を認めるマリア被昇天の教義を先取りしているのではないかと思われる。また幼稚園は、女性の保育者、幼児教育の指導者を養成することを一つの目的としていた。幼稚園は、女性の職業的自立を目指した点において、女性の地位向上、婦人解放を目指す意図があったのではないかと考えられる。

このように本研究では、フレーベル教育学における学校教育から幼稚園教育学への展開を、父性から母性への展開と捉え、ユングの分析心理学にお

ける元型論を方法としながら、球体法則が父性と母性という対立物の結合を目指し、球体が自己のシンボルであることを明らかにしていく。また、球体法則における父と母と子の三位一体を宗教的關係と捉える点を、マリア崇拝と関連づけて考察する、こうした考察を通して、フレーベルの幼稚園が、民衆の民主化の要求に対応する社会的役割を持っていたことも探っていく。

それゆえ、本研究は、第一の目的である父性から母性への展開を探る過程で、ユングの分析心理学の観点が必要となることを明らかにし、さらに第二の目的と第三の目的へと考察を展開させることによって、フレーベルの錬金術師としての側面を浮き彫りにし、従来の研究で解明し切れなかった球体法則の核心に迫ろうとする試みである。

3. 幼稚園禁止令の理由

1851 年 8 月 7 日、プロイセン政府は、幼稚園禁止令を出した。この禁止令が出された理由を、荘司雅子は、プロイセン政府が、フリードリヒ・フレーベルと甥のカール・フレーベルを取り違えたという説を示している。荘司は、次のように述べている。「この禁止令の直接の原因と見られるのはフレーベルの甥カール・フレーベルが幼稚園に関する一書を公けにし、その中で社会主義的無神論的思想を述べていたことである。カールは当時叔父フレーベルとは何の関係もなかったのに、政府は全く不注意にもカール・フレーベルとフリードリヒ・フレーベルとを取り違え、フレーベルの幼稚園が社会主義的無神論的思想を有するものと見なした」⁽¹⁸⁾ と。一書とは、カール・フレーベルとその妻が出版した『家庭教育と学校教授とを結合する完全な陶冶施設の一環としての女子大学と幼稚園』という著書のことである。

しかし、岩崎次男は、幼稚園禁止令の制定及び廃止をめぐる事情について、荘司の説を疑問視し、自由教団との関係を最も有力な理由とし、考察を深めている。岩崎次男は、禁止令の理由を整理して、次の三つの項目に列挙している⁽¹⁹⁾。

(1) フレーベル家は革命的なあるいは社会主義的

なユーリウスやカールを輩出している危険な一家であるという印象が、反動家たちの間にあったこと。

(2) フレーベル主義幼稚園の進出は、国家権力と癒着した正統派教会の支配下にあるキリスト教主義幼児学校等の発展を妨げ、この学校等の国家にとって好都合な影響を損う危険性があったこと。

(3) フレーベルの幼稚園運動が自由教団及びディースターヴェークに率いられた進歩的な教師たち、反動にとってあのいまわしい1848年の革命を惹き起した勢力とみられた自由主義的なまた民主的な諸勢力によって支援され、これらの勢力の勢力拡大の一つの有力な手段になっているとみられたこと。

岩崎は、特に自由教団との関連を重視している⁽²⁰⁾。「自由教団 (freie Gemeinde)」は、19世紀前半のドイツにおける宗教革新運動の中から生まれた。その中でも、プロテスタントの陣営から生まれた宗教革新団体が「自由教団」であった。幼稚園禁止令において、内閣より承認された幼稚園の閉鎖は、ノルトハウゼンが第一原因となっている。ノルトハウゼンにおける幼稚園の問題が、一般の禁止令への原因となったのである。岩崎によれば、「『自由教団』の指導者たちは、フレーベルの幼稚園的教育原理に彼らの理想とする人間を育成するのみ、彼らの勢力を拡大する最も有効な手段であるとみた。』⁽²¹⁾

小笠原道雄も、幼稚園禁止令の真の理由は、自由教団との関係にあることを指摘している⁽²²⁾。ノルトハウゼンの幼稚園は、自由教団によって設立された。ノルトハウゼンの自由教団は、政府にとって悩みの種であった。この教団の創設者であり、有名な伝道師、指導者であったエドゥワルト・バルツアー (Eduard Baltzer, 1814-1887) がこの地に居すわっていたからである。1847年にバルツアーは、このノルトハウゼンに最初の自由教団を設立した。その後各地に自由教団が設立されるようになる。小笠原によれば、「この自由教団は、理性的な教育に大きな位置を置き、そのための最初の基礎としてフレーベルの合自然的な幼稚園教育学を選んだのである。』⁽²³⁾

ノルトハウゼンの例は、多くの地で模倣され、フルトの自由教団では、1851年夏に同様の幼稚園の設立が企図された。しかし、当地のプロテスタント牧

師たちが、激しい抵抗を示した。1851年7月11日に、プロテスタント教区委員が、『フルター日刊紙』の中で、一つの公示を行ない、親たちに、子どもたちをこの幼稚園に行かせることを公然と戒めたのであった。小笠原によれば、「プロイセン政府は、このように、州教会 (Landkirche) にとっての幼稚園の不利益を恐れ、自由教団による幼稚園を禁止したのである。』⁽²⁴⁾ 自由教団が、宗教活動の一環としてフレーベルの幼稚園教育学を取り入れて幼稚園を設立したことが、禁止令に直接関係するのである。つまり自由教団によって設立された幼稚園を閉鎖するために、すべての幼稚園を閉鎖する政策を取ったのである。フレーベルにとって最も苦痛であったのは、彼が無神論者だと見なされることであった。

さて、幼稚園禁止令に対して、フレーベルは、誤謬に基づくものであるから、真相が明らかにされ、撤回されることを要望する声明を発表するとともに、プロイセン文部省に請願書を送り、自分は、無神論でも社会主義でもなく、教育のキリスト教的基礎を承認していると訴えた。禁止令の不当を訴える人々の支援を受け、プロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世宛ての請願書を作成し、1851年10月31日、マーレンホルツ=ビューロー夫人を介して提出した。しかし、それは結局、聞き入れられることはなかった。フレーベルは失意の内に、禁止令の廃止を見ることなく、マリーエンタールで、1852年6月21日に亡くなった。

マーレンホルツ=ビューロー (Bertha von Marenholtz-Bülow, 1810-1893) やディースターヴェーク (Friedrich Adolph Wilhelm Diesterweg, 1790-1866) の尽力もあり、1860年3月10日、プロイセン政府は幼稚園禁止令を廃止した。

幼稚園禁止令の真の理由は、自由教団との関係において説明がつくが、本研究での考察との関係において、その理由を独自に推測してみる。

その最大の理由は、球体法則的キリスト教観が、為政者、教会関係者に恐れられたことにあるのではないかと考えられる。球体法則は、当時の正統なプロテスタントの教義とは異質であり、前述したように、グノーシス主義および錬金術の流れを汲むキリ

スト教観であり、それが異端として排斥されるべきものと見られたにちがいない。特に、マリア崇拜の要素を持つキリスト教観が恐れられたのである。マリア崇拜と幼稚園運動は、強い結びつきを持っていると考えられる。マリア崇拜は、幼稚園運動を通して、女性の地位向上、婦人解放を目指す根拠となっている。絶対王制を維持する側にとっては、女性の地位向上や婦人解放への動きは、自由主義的な民主化運動につながるため、幼稚園運動を弾圧せざるをえなかったと推察される。

グノーシス主義は、4世紀頃にキリスト教の正統な教義が成立した後、キリスト教から激しく論駁され、急速に衰退していったが、グノーシス主義は、底層流に潜み、やがて錬金術に流れ込んだ。このキリスト教の正統な教義と、グノーシス主義および錬金術における対立物の結合の思想との関係が、幼稚園禁止令に関連するというのが、本研究から示唆される独自の仮説である。すなわち、グノーシス主義および錬金術の流れを汲む球体法則的キリスト教観が、主にプロテスタント教会に激しく論駁された結果として出されたのが幼稚園禁止令であるとするのである。つまり、幼稚園禁止令が出された前提となる対立は、キリスト教の教会と球体法則に基づく幼稚園との対立、神—聖霊—イエスの三位一体と神—マリア—イエスの三位一体との対立と捉えることもできるということである。球体法則に基づく幼稚園における母性の尊重や女性の地位向上といった方向は、民主化の方向との一致において、幼稚園の目的が正しく評価されたことによって、幼稚園禁止令の廃止に結実し、さらにそれから90年後、マリア被昇天の教義の宣言によって、その教義を包含するキリスト教観に基づく方向であったと考えるのである。

4. フレーベル教育学批判の意味

フレーベルの死後、マーレンホルツ＝ビューローは、フレーベルの幼稚園教育学に関する体系を、講演と展示によって、他の西ヨーロッパ諸国に紹介した⁽²⁵⁾。とりわけ、イギリスやオランダでは、強力な

フレーベル運動が起こり、フレーベル主義幼稚園が次々と普及した。またアメリカでは、エリザベス＝ピーボディー (Elisabeth Peabody)、マチルデ＝クリエ (Mathilde Kriege)、マリア＝クラウス＝ベールテ (Maria Kraus-Boelte) が、フレーベルの思想を普及させ、フレーベル主義幼稚園が創設された。日本には、1880年代から1890年代にかけて、北アメリカにおけるフレーベル運動の影響により、フレーベル主義幼稚園が導入された。

フレーベルの思想および幼稚園の普及により、フレーベルの幼稚園教育学への理解が深まる反面、その批判も見られるようになる。デューイは、『学校と社会』(1899年)の中で、「第6章」を「フレーベルの教育原理」として、遊戯などに関するフレーベルの抽象的な哲学解釈とそれに起因する象徴主義を批判した。象徴主義とは、フレーベルの恩物は、自然現象や自然界に存在するあらゆるものを象徴したものであるという立場である。デューイは、恩物や遊戯の系統性や順序性を疑問視するのである。

デューイは、フレーベルの象徴主義の多くは、彼自身の生活や仕事をめぐる二つの特殊な条件が生み出したものだけということを指摘する。彼は、「その第一は、当時においては、児童の成長に関する生理学的並びに心理学的事実や原理についての知識が十分ではなかったということであり、そのためにフレーベルは、しばしば、遊びなどに伴う価値を説明するにあたって、不自然かつ人為的なやり方に頼らざるを得なかったのである」⁽²⁶⁾ という。つまり、子どもの遊びに対してこじつけ的で、抽象的な哲学的理由づけを与えているとして、フレーベルの象徴主義を批判している。デューイはまた、「第二には、当時のドイツの一般的な政治的社会的状況が、そのもとは、幼稚園内部での自由でかつ協同的な社会生活とその外部に広がる世界での社会生活との間に連続性を考えるなど、とうていできないようなものであったということである」⁽²⁷⁾ と述べている。つまり、彼は、学校を、子どもの興味を尊重した活動的な社会生活を営む場所と考える立場から、フレーベルは教室で行なう「仕事」が社会生活に含まれている倫理的諸原理を再現したものとは考えられなかったと批

判する。

デューイは、『民主主義と教育』（1916年）において、哲学思想の領域の内部には、絶対的な目標の働きを代表するものを提供しようとする二つの典型的な試みがあったと指摘する。それは、フレーベルとヘーゲルであるが、両者は完全な原理が漸進的に実現されていく道程については考えを異にしている。デューイは、「フレーベルによれば、行動に駆り立てる力は、絶対者の本質的な特徴に相応する象徴、主として、数学的な象徴を示すことである。これらの象徴が子どもに与えられたときに、子どもの内部に眠っている全体（the Whole）、すなわち完全性が覚醒されるのである」⁽²⁸⁾と述べている。デューイは、その例として、幼稚園で子どもたちが環になって集まる際、円形が利用されるのは、「それが人類の集合的生命一般を象徴するものだからである」と指摘する⁽²⁹⁾。

デューイは、教育の過程は不断の成長の過程であると捉えるので、フレーベルが教育を子どもの成長と捉える点に、親近性を感じて、評価している。しかしデューイは、フレーベルが、発達を、潜在的な本然の性能を開発することであると捉え、完成された結果を重視したことを批判している。

デューイは、完全に開発がなされた状態という遠い先の目標は、超越的なものと表わされるが、それは何か直接的な経験や知覚とはかけ離れたものであると捉える。デューイは、「フレーベルは、経験の具体的な諸事実を発達の超越的な理想の象徴であるとみなすことによって、両者を結びつけた」⁽³⁰⁾と述べている。デューイは、ある独断的な、先験的な方式に従って既知のものを象徴と見なすことは、その先験的な形式に訴えるものならどのような類似物でも、法則と見なそうとするロマン的空想へ誘う、と象徴主義を批判する。デューイは、「象徴的表現の形成者である成人たちが、当然その方法の立案者であり、また管理者である。その結果は、フレーベルの抽象的な象徴的表現への好みがかげしばしば彼の子どもに対する共感的な洞察力をうち負かすことになった。そして教育史上、まれに見る独断的で、外から押しつけられた命令的な体系が発達にとって代わっ

たのである」⁽³¹⁾と述べている。デューイは、フレーベルの球体法則や部分的全体の思想、恩物の体系や順序は、子どもの自由な自己活動に反し、フレーベルの神秘主義的思考に基づいて、象徴を外から独断的に押しつけるものでしかないといふ厳しい批判の目を向けるのである。

デューイの後継者であるキルパトリックは、デューイのフレーベル批判の論拠に従いつつ、詳細にかつ徹底的にフレーベルの教育思想およびフレーベル主義幼稚園を批判した書『フレーベルの幼稚園の諸原理の批判的検討』を1916年に公刊した。キルパトリックは、この書において、フレーベルの部分的全体の思想、対立の法則および結合の法則等を否定的に捉え、発達における生得観念の学説、予感説、象徴主義については拒絶している。

キルパトリックは、フレーベルの「対立の法則」は、「宇宙の基本法則」であり、「彼の教育体系の全体的な意味」の基礎であると理解するが、「対立の法則」を否定している⁽³²⁾。そして、実践的な幼稚園教員には、その法則は有益でないと説く。

キルパトリックは、フレーベルにおける発達理論や幼児期への注目について、評価すべき点もあると考えるが、誤った点があったことを指摘している。とりわけ、発達における生得観念の学説を否定する。また、恩物体系における象徴主義についても、生得観念がその基礎を供給するものであり、迷信よりも固くなると否定する。キルパトリックは、次のように述べている。「われわれは、フレーベル主義の象徴主義に関して、そのすべての痕跡が幼稚園の目的から除去され、そして彼の独創的な実践が確実な根拠のある心理学の諸要求に応じて徹底的に改造されなければならない、と結論を下す。したがって、恩物体系はそのようなものとして消えなければならないし、恩物体系とともに恩物と仕事の大部分は消えなければならない。いくつかの遊具は、大きさと形を変えて残るだろう。使用法は、概して非常に異なるだろう。子どもたちは、子どもらしい方法で、個人的な目的のために、しかも命令されることなく、これらと他の玩具で遊ぶだろう。ボールは、決して統一性との関係で考えられてはならないし、また立方

体は、決して多様性との関係で考えられてはならないだろう。積木が場所を占めることは、幼稚園教員に関係ないだろう」⁽³³⁾と。

キルパトリックは、恩物だけでなく、フレーベルの書くことは、象徴主義と他の誤った心理学に満たされているので、賢明な教員養成にはもはや、その使用法を教科書として用いないと断定している⁽³⁴⁾。キルパトリックが拒絶するフレーベルの教育体系が、受け入れられ、称賛された背景には、そうした人々が、他の教育思想をあまり知らなかったからであると指摘している。キルパトリックは、フレーベルの体系における有力な点は、彼の幼児期への愛情と思いやりにおいて最も偉大であったと指摘する。それは、ルソーはもとより、ペスタロッチーよりも勝るとし、フレーベルが同時代のだれよりも、子どもの個性を尊重したと高く評価している⁽³⁵⁾。

キルパトリックによれば、フレーベルの最も有力な地位の一つは、社会的関係性についての主張である⁽³⁶⁾。この点について、ルソーは甚だしく墮落していて、ペスタロッチーはよりよかったが、フレーベルの理解は遙かに勝っていた。幼稚園と学校は、社会生活への現実的な関与によって社交性の成長のための機会を与えなければならない。

キルパトリックは、フレーベルが幼稚園によって、子どもたちの集団が教育活動に加わる時、いかに幸せになれるかを世界に与えた実践的な立証が、最も価値のあることだと指摘する。キルパトリックは、次のようにいう。「われわれは、彼の神聖な流出の論考を受け入れる必要はない。われわれは、彼の発達の理論を拒絶することができる。しかし、どのように子どもたちが幸福に作業をすることができ、するのかという一定の確実な手本として、フレーベルの幼稚園は、『丘の上にある都市』として立っている」⁽³⁷⁾と。このように神秘主義的な球体法則および発達の学説を拒絶するキルパトリックも、19世紀初期の幼児学校と幼稚園の対比において、子どもの自発性と興味を尊重した幼稚園の優越が明らかであることを指摘する⁽³⁸⁾。

ところで、わが国幼児教育の父であり、東京女子高等師範学校教授並びに同校附属幼稚園主事であつ

た倉橋惣三(1882-1955)は、フレーベル研究者でもあるが、彼はフレーベルの恩物について独自の解釈をしている。

倉橋は、フレーベルは瞑想癖があり、瞑想的な性質であったとする。つまりフレーベルは、物事を難しく考える性質であった。したがってフレーベルの教育学は、いわゆる象徴主義と論理主義に特徴がある。それゆえフレーベルの恩物は、統一的な法則性を有する「系列玩具」⁽³⁹⁾なのである。しかし倉橋は、そうした恩物の法則性を批判的に見ている。

倉橋は、「かくて、幼稚園教育の中心とされ来った恩物は、象徴主義と論理主義とを以て意味深げなる尊重を与えられるよりは、フレーベルが幼児の遊びにおける表現と創作との教育指導のために、物的材料の必要をはやく着眼して、その積極的提供に苦心したところに尊重を払うべきである」⁽⁴⁰⁾と述べている。つまり倉橋は、フレーベルの玩具を恩物としてではなく単なる玩具として使用すべきであると考える。倉橋は端的に、「恩物としてならば批難する。玩具としては賛成する。これが明白なる余の論なのである」⁽⁴¹⁾という。

さて、倉橋は、フレーベルの教育的創見の一つには彼がよく子どもに学んだ結果であると考えている。それゆえ倉橋は、フレーベルにおける自己活動の原理に関して、次のような独自の見解を示す。「幼稚園教育の第一原理たる、『自己活動』の原理論は、フレーベルの頭から織り出されたものでなく、天からくだり、地から湧き上がったものでもなく、また古典から漁り得たものでも勿論ない。ただよく子どもから学んだのである。自己活動の第一原理に基づいて、その教育方法として用いられた遊戯でも手技でも、乃至いろいろの教育玩具でも、いずれも皆子供から教えられ、子ども自身の生活から思いついたものである。この意味において、フレーベルの師はシェリングでもなく、ペスタロッチでもなく、実に子どもであるというべきである」⁽⁴²⁾と。ここには倉橋独自のフレーベル理解が示されている。

このように、デュイイは、フレーベルの球体法則や部分的全体の思想、象徴主義、恩物の体系や順序は、子どもの自由な自己活動に反するとして、厳し

く批判している。キルパトリックも、フレーベルの球体法則における対立の法則および結合の法則、部分的全体の思想を否定的に捉え、恩物体系における象徴主義を拒絶する。倉橋惣三も、フレーベルの恩物における象徴主義と論理主義を批判し、恩物の法則性を拒否する。三者の共通点は、フレーベルの球体法則および恩物における象徴主義と順序に対する批判である。しかし、三者が批判し拒絶した球体法則および恩物体系は、本研究で試みたように、ユング心理学の観点から見ることによって、新たな知見が得られる。つまり、球体法則も恩物体系も、心の問題の投影であるという深層心理学的観点が、デュイにもキルパトリックにも倉橋惣三にも欠落していたということである。

繰り返すまでもなく、球体は、個性化過程の到達点である「自己」のシンボルであり、ボールから始まり、切断面を持つ立体へと展開する恩物体系は、人間の意識の発達過程を示唆している。要するに、錬金術の作業過程は、心の問題の投影であり、個性化過程に対応するというユング心理学の観点は、フレーベルの球体法則および恩物体系の心理学的側面を探る際に有力な方法となることが明らかになった。デュイもキルパトリックも倉橋惣三も、フレーベルに錬金術師の側面があり、球体法則が、錬金術の思考法と一致することに気づかなかったのである。

イエナ大学のカーステン・ケンクリース (Karsten Kenklies) は、日本ベスタロッター・フレーベル学会第30回大会(2012年9月16日、玉川大学)の特別講演「ドイツにおけるフリードリヒ・フレーベルの今日的意義」で、フレーベルの思想の独自性について次のように述べている。「その独自性は、何よりも彼が異端である点に見出せるというものです。このことは、ともかく彼の自然科学的洞察が、ここではとりわけ結晶学に接近しているという点に当てはまりますし、また彼の宗教的見解にもあてはまります。彼の宗教的見解は、まさに当時はまったく正統的なものではなかったのです。つまり、フレーベルの宗教は、彼の教育学的熟慮すべての出発点であり中心点です。しかし、その宗教は、典型的なキリスト教

というよりは、むしろ特殊なプロテスタンティズムの融合物が、古いヨーロッパの知恵の教えによって拡張されたものなのです。この知恵の教えは、ヨーロッパではよく『ヘルメス哲学』という名前のもとにまとめられます。これは恐らく一般に認知されているよりも重要な影響を18世紀全体と19世紀初めにもたらしました。こうした伝統は、カバラ、錬金術あるいは魔術のような概念と、また例えば、薔薇十字団やフリーメーソンの会員のように才気あふれた人々のグループと結びついています」⁽⁴³⁾と。ケンクリースも指摘しているように、フレーベルの球体法則は、当時のキリスト教の正統な教義と異なり、むしろ「ヘルメス哲学」すなわち錬金術に近い思考法であった。

む す び

本研究は、フレーベル教育学研究の本道は、球体法則の意味を探ることにあるという立場から考究してきた。従来の研究において、球体法則の難解な部分、また恩物が批判されてきた部分について、新たな角度から光を当てることができたと思われる。しかし、これをもって、毛頭すべてが解明されたというわけではなく、まだまだ明らかにされなければならないことが多くあるにちがいない。もし、球体法則が錬金術と同様に心理学的側面を持つならば、球体法則や恩物体系は精神療法と関連するものと捉えることができるのではないかと思われる。おそらくフレーベルの球体法則は、東洋の禅体験を言語化することが難しいのと同様に、体験の中に真実があるものと考えることができるであろう。それゆえ球体法則の真意を、ユング心理学の観点から探ることは、フレーベルの内面的な体験そのものに迫ろうとする試みだったといえるであろう。

注

- (1) 酒井玲子『わが国にみるフレーベル教育の探求』共同文化社、2011年、参照。
- (2) 同上書、193頁。
- (3) 豊泉清浩「フレーベル教育学の研究史について」、『群

- 馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第 57 巻、2008 年、183-189 頁、参照。
- (4) 荘司雅子『フレーベルの教育学』玉川大学出版部、1984 年。
- (5) 荘司雅子『フレーベル研究』玉川大学出版部、1984 年。
- (6) 岩崎次男『フレーベル教育学の研究』玉川大学出版部、1999 年。
- (7) 倉岡正雄『フレーベル教育思想の研究』風間書房、1999 年。
- (8) 小笠原道雄『フレーベルとその時代』玉川大学出版部、1994 年。
- (9) 前掲、豊泉清浩「フレーベル教育学の研究史について」、189-195 頁、参照。
- (10) 小笠原道雄「フレーベル研究者の立場から」(シンポジウム「ペスタロッチー・フレーベル研究の現状と課題」)、『人間教育の探究』第 20 号、日本ペスタロッチー・フレーベル学会、2008 年、70 頁、参照。
- (11) 豊泉清浩「フレーベル教育学における基本構想の展開に関する一考察——父性から母性へ」、『浦和論叢』第 32 号、浦和大学短期大学部、2004 年、131-155 頁、参照。
- (12) F.Fröbel, An unser deutsches Volk, in: F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg.v.W.Lange, Abt.1, Bd.1, 1862, 1966, S.214-241. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第一巻(教育の弁明)玉川大学出版部、1977 年、339-378 頁。
- (13) F.Fröbel, Grundzüge der Menschenerziehung, in: F. Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Abt.1, Bd.1, a.a. O., S.428-455. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第三巻(教育論文集)玉川大学出版部、1977 年、113-159 頁。
- (14) F.Fröbel, Friedrich Fröbel, seine Erziehungsgrundsätze, seine Erziehungsmittel und Weise, wie seine Erziehungszwecke und sein Erziehungsziel im Verhältnis zu den Strebungen der Zeit und ihren Forderungen. Dargestellt von ihm selbst, in: F.Fröbel's gesammelte pädagogische Schriften, Hrsg.v. W.Lange, Abt.2, 1862 u.1874, 1966, S. 239-270. 小原國芳・荘司雅子監修『フレーベル全集』第四巻(幼稚園教育学)玉川大学出版部、1981 年、491-541 頁。
- (15) 豊泉清浩「フレーベル教育学の研究方法としてのユング心理学について」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第 58 巻、2009 年、113-115 頁、参照。
- (16) 豊泉清浩「フレーベル教育学の西洋精神史における位置づけについて」、『群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編』第 61 巻、2012 年、166 頁、参照。
- (17) 豊泉清浩「フレーベルの球体法則における対立と結合——ユング心理学の観点から」、前掲『人間教育の探究』第 20 号、7 頁、参照。
- (18) 前掲、荘司雅子『フレーベルの教育学』、80 頁。
- (19) 前掲、岩崎次男『フレーベル教育学の研究』、327 頁。
- (20) 同上書、306-313 頁、参照。
- (21) 同上書、312-313 頁。
- (22) 前掲、小笠原道雄『フレーベルとその時代』、412-416 頁、参照。
- (23) 同上書、414 頁。
- (24) 同上書、415 頁。
- (25) 小笠原道雄『フレーベル』清水書院、2000 年、174-175 頁、参照。
- (26) J.Dewey, The Middle Works, 1899-1924, Volume 1: 1899-1901, Southern Illinois University Press, 1976, p.84. ジョン・デューイ、毛利陽太郎著訳『学校と社会』(世界新教育運動選書 10) 明治図書、1985 年、163 頁。
- (27) ibid., p.84. 同上書、163 頁。
- (28) J.Dewey, Democracy and education. an introduction to the philosophy of education, New York: the Macmillan Company, 1916, p.67. デューイ、金丸弘幸訳『民主主義と教育』玉川大学出版部、1984 年、103-104 頁。
- (29) ibid., p.67. 同上訳書、104 頁。
- (30) ibid., p.68. 同上訳書、104 頁。
- (31) ibid., p.68. 同上訳書、105 頁。
- (32) W.H. Kilpatrick, Froebel's kindergarten principles. critically examined, New York: the Macmillan Company, 1916, p.195-196.
- (33) ibid., p.199-200.
- (34) ibid., p.200-201.
- (35) ibid., p.203.
- (36) ibid., p.203-204.
- (37) ibid., p.206.
- (38) ibid., p.206.
- (39) 倉橋惣三『倉橋惣三選集第一巻』フレーベル館、1965 年、378 頁。
- (40) 同上書、391 頁。
- (41) 倉橋惣三『倉橋惣三選集第二巻』フレーベル館、1965 年、201 頁。
- (42) 同上書、270 頁。
- (43) カーステン・ケンクリース、佐久間裕之訳「ドイツにおけるフリードリヒ・フレーベルの今日的意義」、『人間教育の探究』第 25 号、日本ペスタロッチー・フレーベル学会、2013 年、86 頁。